

## テイル構文の項構造と解釈の関係について\*

石 田 尊

### On the Correspondence between the Argument Structure of *(te)iru* and the Interpretations of *te-iru* Construction

ISHIDA, Takeru

キーワード：「ている」、テ節、補助動詞構文、上昇構文、コントロール構文

#### 0. イントロダクション

日本語の述部に現れるテ-イ(ル)は、何らかの継続を表すアスペクト形式であるとされ、動作継続や結果継続の解釈を表すと見なされている。また、同一の形式で、経験、習慣、完了等の名称で呼ばれる解釈も表すと考えられている。本稿では便宜的に、以下の例のようなものを各解釈の典型例と見なし、考察を進める<sup>1</sup>。

- |                          |      |
|--------------------------|------|
| (1) a. 健太が走っている          | 動作継続 |
| b. コップが割れている             | 結果継続 |
| c. 涼子は先週その男と会っている        | 経験   |
| d. 涼子はそのときにはもう意識を取り戻していた | 完了   |
| e. 健太は毎日海で遊んでいる          | 習慣   |

形態的には同一の形式と見なせるテイルが、これらの解釈を表し分けるためには、それなりの意味的・文法的な支えが必要であると考えられる。共起する副詞の類、テイルが後接する動詞の意味論的なタイプなど、テイルの解釈を定めるための手がかりは、直感的にはいくつかあるように思われるが、本稿では、テイルの解釈決定に関わるそれらの要因の詳細な検討は行わず、(1)に示した5つの解釈にテイル構文を仮に分けておき、それぞれの項構造上の特徴を観察するところから検討を始める。

さて、本稿がテイル構文の項構造上の特徴について取り上げる理由の一つは、この、形態的には単一の形式に見えるテイルの構文の解釈上の複雑さ・多様さにある。仮に、この構文の項構造が単一ではなく、複数のパターンを有していると考えられるのであれば、構文の項構造上の特徴が、テイル構文の解釈上の多様さを成り立たせる要因の一つとして機能している可能性を考察することができる。併せて、テイル構文の項構造の問題を取り上げることで、テイル構文の統語構造の問題に対する示唆が得られるのではないか、ということも、本稿がこの構文の項構造に注目する理由の一つとなっている。

本稿はこのように、項構造の記述を出発点とし、その成果をもとに構文の解釈との対応関係を明らかにすることを第一の課題としている。以下、次節において、テイル構文に対する分析のいくつかを確認し、2節において、本稿の考察の対象であるテイル構文の項構造に関する観察を行う。3節では、観察の成果をもとに解釈と項構造の関係に関する一般化を提示し、4節では本稿の提案を検証する。

\* 本稿は、石田(2005、2006、2007)での検討をもとに、今回新しい観察を追加してまとめられたものである。口頭発表の際、またその後の研究の過程で有益なコメントをくださった方々に感謝申し上げます。

1 各解釈の呼称自体も便宜的なものである。またテ-イ(ル)については、以下簡略にテイルと表記する。

## 1. 問題の所在

テイル構文の構造には、単文構造説、上昇構文説、コントロール構文説の3つの可能性が考えられる。単文構造説では、テイルは動詞の活用／屈折の一つであり、「走る」と「走っている」で異なった統語構造にはならない。上昇構文説の場合には、テ節内の動詞の項が主節の主語として上昇する。コントロール構文説では、テ節内には主節主語にコントロールされるゼロ代名詞が現れる。上昇構文説でもコントロール構文説でも、「て」と「いる」のうち少なくとも「いる」は独自に投射をし、テ節を補部とする動詞句を構成することで、複文構造的な文構造を形成する<sup>2</sup>。

- (2) a. [s 健太が [vp 走った]] 非テイル文  
 b. [s 健太が [vp 走っている]] 単文構造説  
 c. [s<sub>1</sub> 健太<sub>i</sub>が [vp<sub>1</sub> [s<sub>2</sub> t<sub>i</sub> [vp<sub>2</sub> 走って]] いる]] 上昇構文説  
 d. [s<sub>1</sub> 健太<sub>i</sub>が [vp<sub>1</sub> [s<sub>2</sub> PRO<sub>i</sub> [vp<sub>2</sub> 走って]] いる]] コントロール構文説

さて、単文構造説と上昇構文説では、文内で述語／述部からθ役割を得られる項の数は、非テイル文の(2) aと同様、自動詞なら1つ、他動詞なら2つとなる。しかし、コントロール構文説では、テ節内に現れる音形を持たない主語と主節の主語は、同一の指示対象を持ちながらも別のθ役割を得る。

テイル構文の構造に関して、三原(1997)では、動作継続のテイル構文は上昇構文であり、結果継続のテイル構文はコントロール構文であるとする分析も示されている。本稿が取り上げる現象は、三原(1997)で示されている現象とは重ならないため、三原(1997)における指摘の検討は先送りするが、少なくとも、テイル構文の統語構造に対して、上昇構文かコントロール構文か、というような問題が存在することは確認できる。

次節では、こうした問題と関わる、テイル構文の項構造の問題に対する観察を行う。

## 2. 項構造の観察と記述

この節では、テイル構文の解釈ごとに観察と記述とを行い、それぞれのテイル構文の項構造上の特徴を確認する。

### 2.1. 経験読みテイル構文

この箇所ではまず、経験読みテイル構文のうちでも、無生名詞の主題句を持つものの許容度から検討を始める。

- (3) a. この車のドライブシャフトは先月折れている  
 b. この車は先月ドライブシャフトが折れている  
 (4) a. ??この車のエンジンは先月調整している  
 b. ?この車は先月エンジンを調整している  
 (5) a. ?この車のエンジンは先月社長が調整している  
 b. この車は先月社長がエンジンを調整している

2 複文構造的な上昇構文構造とコントロール構文構造の場合において、「て」がテ節の主要部であり独自の投射を形成するのか、それとも動詞の屈折した形の一部と見なすべきかといった問題は、本稿では取り上げない。また、動詞句内主語仮説や、VP-shell 構造などを導入すれば、(2)の構造はより詳細なものになるが、現状では、単文構造／上昇構文／コントロール構文の区別が確認できればよいとしておく。

(3)は、自動詞+テイルの述部を持つ、経験読みテイル構文である。(4)(5)は、どちらも他動詞+テイルの述部を持つ、経験読みテイル構文であるが、(4)では「調整する」の行為者に当たる要素が現れておらず、(5)では「社長が」というかたちで現れている。

さて、(3)～(5)の各例では、それぞれのaとbとを比較した場合、bの方が許容度が高いか、許容度には差がない場合でも、aの場合に微妙な情報の欠落感が生じる。この例の判定には個人差もあろうが、各aの例よりは各bの方が欠落感がなく、許容度の問題が小さい、といったことは確認できる。

これらの例における欠落感や許容度上の問題が、本来はあるべき要素の省略によるものだと考えた場合、(3)～(5)の各aの例は、以下のような空範疇を備えた文である可能性が考えられる。bの例と合わせて示しておく<sup>3</sup>。

- (6) a. この車のドライブシャフト<sub>i</sub>は先月<sub>e<sub>i</sub></sub>折れている  
 b. この車は先月ドライブシャフトが折れている  
 (7) a. ??この車のエンジン<sub>i</sub>は先月<sub>e<sub>i</sub></sub>調整している  
 b. ?この車は先月<sub>e</sub>エンジンを調整している  
 (8) a. ?この車のエンジン<sub>i</sub>は先月社長が<sub>e<sub>i</sub></sub>調整している  
 b. この車は先月社長がエンジンを調整している

この(6)～(8)のような空範疇の認定が妥当なものであるとするならば、(6)～(8)の許容度は、文内、さらに言えばテ節内での空範疇の出没と関係していることが予測できる。以下、類例を検討する。

- (9) a. 健太<sub>i</sub>は先週<sub>e<sub>i</sub></sub>その女性を駅前で見かけている  
 b. その神社<sub>i</sub>は昨年<sub>e<sub>i</sub></sub>地震で倒壊している

(9)は主題句と同一指示の空範疇としてテ節内の主語が想定される例であり、許容度は安定して高い。

- (10) a. ??件のピカソ<sub>i</sub>は先月<sub>e</sub>ある画商に<sub>e<sub>i</sub></sub>売却している  
 b. ??その礼拝堂<sub>i</sub>は先月<sub>e<sub>i</sub></sub>解体している

行為者が明示されない(10)は、(7)aと同様に、話者によっては許容度がかなり下がる。ただし、行為者に関して話者指向の読みが成立する場合などには、許容度が高まるようである。これは、行為者が明示されている(8)aや(11)と同様に解釈できるためであろう。

- (11) a. ?件のピカソ<sub>i</sub>は先月オーナーがある画商に<sub>e<sub>i</sub></sub>売却している  
 b. ?その礼拝堂<sub>i</sub>は先月A社が<sub>e<sub>i</sub></sub>解体している  
 cf. はい、確かにその礼拝堂は先月当社が解体しておりますが……

(11)ではテ節内の主語は音形を持って示され、かつ主題句と同一指示となる空範疇が別に現れるが、同タイプの(8)a(=(5)a)と同様に、許容度の低下や欠落感が生じる場合がある。ただし、(11)参照例のように、特に許容度上の問題を感じにくいものもあり、テ節内の主語が空範疇となる(9)の場合と比べて、やや問題が起きやすいといったレベルであると考えられる。

以上のことから、無生名詞の主題句を持つ経験読みテイル構文について、以下のような特徴が指摘できる。

3 ここでは各空範疇が痕跡であるのか、あるいはゼロ代名詞的なものであるのかについては特に問わないが、情報の欠落感と関与する場合については、痕跡ではなくゼロ代名詞的な空範疇である可能性が考えられる。また、各bの例では、主題句と「ドライブシャフト」や「エンジン」といった名詞句との間に所有関係が認められるため、以下に示すように「ドライブシャフトが/エンジンを」という名詞句内には、主題句と同一指示となる何らかの空範疇が存在する可能性がある。ただし、現状においてはその有無を確認できる経験的証拠がなく、今後の課題となる部分である。

(i) この車<sub>i</sub> ..... [e<sub>i</sub> エンジン (を)]

## (12) 経験読みテイル構文の主題句と関連づけられるテ節内要素の特徴

- a. 音形がある場合よりもない場合に許容度の低い例が現れやすい
- b. 主題句と同一指示となる空範疇がテ節の主語である場合の方が、目的語である場合よりも許容度が高い

(12) a と (12) b とが述べることは、厳密にはそれぞれ独立した問題と関連していると考えられる。

(12) b については現象の指摘に止め、ここでは、(12) a が意味することについて、さらに検討する。

これまでに見てきた経験読みテイル構文の例は、非テイル文にすると許容度が下がる。

## (13) a. この車は先月ドライブシャフトが折れている

- b. ?この車は先月ドライブシャフトが折れた

## (14) a. この車は先月社長がエンジンを調整している

- b. ?この車は先月社長がエンジンを調整した

日本語には、述語／述部の項の数を超えて主題となる名詞句が現れる構文（以下、主題構文）があり、述語／述部の項以外に主題を持つ文は、許容度上の問題が生じる場合もあるものの、解釈上の条件を整えば、完全な非文にはならない<sup>4</sup>。(13) (14) 各 b は、述語「折れる」「調整する」が要求する項の数よりも名詞句の数が多いが、比較的許容度の高い例となっている。この理由は、各 b が主題構文であり、臨時的に主題が追加された構文として解釈されるためであると考えられる。有生名詞の主題の例でも、(15) b のように、(13) (14) 各 b 程度の許容度となることが確認できる。

## (15) a. 木村さんは去年娘さんが芥川賞を受賞している

- b. ?木村さんは去年娘さんが芥川賞を受賞した

- c. 木村さんの娘さんは去年芥川賞を受賞した

一方で、(13) (14) (15) 各 a の経験読みテイル構文の例は、それ自体安定して高い許容度を示す。すでに (12) a にまとめたように、経験読みテイル構文では、(テ節内の) 述語の項の数よりも一つ多く名詞句が現れた場合の方でも許容度は低下せず、非テイル文では、述語の項の数を超えて名詞句が現れる主題構文の方が許容度が低いという結果になる。

以上から、経験読みテイル構文の、構文としての項構造に関しては、以下のような推測が成り立つ<sup>5</sup>。

## (16) 経験読みテイル構文の項構造

- a. 主題句は非項要素ではなく何らかの要素の項である
- b. 非テイル文よりも経験読みテイル構文の方が1項多い

この (16) は、現状では各例に対するナイーブな直感に基づいた推測に過ぎない。ただし、直感の上では、経験読みテイル構文は文内に述語の項の数プラス1のθ位置を持つ構文である、ということは確認できるということでもあり、この直感に従って、他の解釈のテイル構文についても検討を行うことで、本稿では、解釈と項構造、統語構造の関係を考える材料としたい。

4 主題構文の許容度は、述部の状態性ではなく、(i) が示すように述部の内容が主題の有意な属性・性質を表しているか否かによると考えておく。天野 (1987/1990) を参照。

(i) a. 私たちは、空襲で家財道具がみんな焼けてしまった 天野 (1987: 101)

b. 勇二は教師に殴られて前歯が折れた 天野 (ibid.)

5 経験読みテイル構文の許容度については、以下 (i) a のように主題句と同一の指示対象を持つ空範疇が現れる場合と、(i) b のように何らかの所有関係が認められる場合の比較だけでなく、(i) b と c との比較のように、所有関係上の異なりについても検討する必要があるが、本稿では紙幅の都合もあり、省略せざるを得ない。ここでは、(12) の傾向を覆し、(16) の推測を無効とするだけの強い反例が現れなければよし、テイル構文全体の記述を優先しておく。

(i) a. ?その車<sub>i</sub>は先週社長が e<sub>i</sub> 整備している。調子はいいはずだよ。

b. その車は先週社長がエンジンを整備している。調子はいいはずだよ。

c. ?その車は先週社長が書類をそろえている。問題はないはずだよ。

## 2.2. 動作継続と結果継続のテイル構文

経験読みテイル構文に続いて検討するのは、以下のような動作継続と結果継続のテイル構文である。

- (17) a. 涼子が車を洗っている                      動作継続  
       b. 健太が走っている                         動作継続  
 (18) a. コップが割れている                      結果継続  
       b. 鉢植えが枯れている                      結果継続

これらの例について、経験読みテイル構文の場合と同様、主題句を持つ場合を考える。動作継続のテイル構文の場合、主題句と主格句をとともに持つ例を作ろうとすると、(19) (20) 各 b で明らかなように、文の許容度に問題が生じるか、主格句の実体の動作継続になり、主題句の実体の動作継続にはならない<sup>6</sup>。

- (19) a. 涼子の妹が庭で車を洗っている  
       b. ??涼子は妹が庭で車を洗っている  
 (20) a. 健太の弟が今先頭を走っている  
       b. ?健太は今弟が先頭を走っている

この結果は、経験読みテイル構文の場合と比べて逆の結果であり、主題句があった方が許容度等に問題が生じるという点で、むしろ (13) (14) (15) 各 b の主題構文の場合に近い。

結果継続のテイル構文の場合は、以下ようになる。

- (21) a. コップの縁が欠けている  
       b. そのコップは縁が欠けている  
 (22) a. 鉢植えの根が腐っている  
       b. その鉢植えは根が腐っている

(21) (22) 各 b の例は、許容度上の問題は特に見られないが、動作継続の場合と同様に、主題句の結果状態ではなく主格句の結果状態を表す文となる。「縁が欠ける」「根が腐る」といった事象により、主題句の実体「そのコップ」「その鉢植え」も影響を受けるが、厳密に言えば「そのコップ」が欠けたわけでも、「その鉢植え」が腐ったわけでもないため、これらは主格句の実体の結果状態の記述が主題句の属性叙述<sup>7</sup>となっている例だと考えることができる<sup>8</sup>。

以上から、動作継続にせよ結果継続にせよ、主題句を組み込んだ例では主題句の動作や結果状態の継続とはならず、主格句の実体に関するいずれかの継続を表すものとなることが確認できたとする。この結果は、一般の主題構文の場合と同じであり、経験読みテイル構文とは異なり、動作継続や結果継続の読みのテイル構文では、項が増えていることを示すような解釈上、直感上の特徴は見いだせない

6 典型的な場合、動作継続も結果継続も、中立叙述の主格句を備えた眼前描写が基本の構文であるように思われる。したがってここでの例も、(19) (20) 各 a の例については、主格句を主語とするものにしておくと、主題句形式の主語を持つ場合でも、許容度に大きな問題が生じるわけではない。

(i) a. 涼子の妹は庭で車を洗っている                      cf. (19) a  
       b. 健太の弟は今先頭を走っている                      cf. (20) a  
 (ii) a. (その) コップの縁は欠けている                      cf. (21) a  
       b. (その) 鉢植えの根は腐っている                      cf. (22) a

ただし、主題の名詞句としての指示上の要件と、不定の無生名詞という特徴がミスマッチとなり、この注 (ii) の例のように、名詞句の指示上の調整が必要になる場合もある。なお、(21) (22) 各 b の例は、主題句が組み込まれたことで結果継続のテイル構文の主題構文版となった、というよりは、別のタイプのテイル構文として扱った方が妥当であるかもしれない。今後の課題となるところである。

7 属性叙述という概念については、益岡 (1987) を参照。

8 もっとも、「健太がセーターを着ている」「涼子が胸にコサージュをつけている」のような装着等を表す動詞の例を(「健太」や「涼子」に関する)結果継続のテイル構文だとする場合もあり、同様に全体-部分関係の関わる (21) (22) 各 b のような例を、主題句の実体に関する結果継続と考える場合もあるかもしれない。ここでは、結果継続については、状態変化自動詞や位置変化自動詞の内項の実体の変化の結果生じた状態を記述するもの、というように、解釈を限定しておきたい。

いということになる。

(23) 動作継続・結果継続のテイル構文の項構造

- a. 主題句は非項要素であり、主題構文の主題句である
- b. 非テイル文の場合と、文の項の数は変わらない

### 2.3. 完了読みテイル構文

完了読みテイル構文については、以下のように (12) の傾向と同様の結果が見られる。

- (24) a. 涼子の意識<sub>i</sub> は健太が到着したときにはもう e<sub>i</sub> 回復していた
- b. 涼子は健太が到着したときにはもう意識が回復していた
- (25) a. 健太の論文は8月にはもう e<sub>i</sub> 完成している (だろう)
- b. 健太は8月にはもう論文が完成している (だろう)
- (26) a. 涼子<sub>i</sub> は健太が帰国したときにはすでに e<sub>i</sub> 他の男と結婚していた
- b. ?涼子<sub>i</sub> は健太が到着したときにはすでに強盗が e<sub>i</sub> 連れ去っていた
- (27) a. 健太は8月にはもう e<sub>i</sub> 日本を離れている (だろう)
- b. ?健太は8月にはもう母親が e<sub>i</sub> 引き取っている (だろう)

(24)～(27)においては、テ節内の項がすべて音形を持っていると考えられる (24) b・(25) b と、テ節内の主語に相当する要素が空範疇になっていると見なせる (24) a・(25) a・(26) a・(27) a には許容度上の問題は起こらない。しかし、テ節内の目的語が音形を持たないと見なせる (26) b・(27) b では、許容度に問題が生じている。

こうしたことから完了読みテイル構文は、テ節内の要素に関して音形を持たない要素がある場合に許容度の低い例が現れやすく、また、主題句と同一指示となる空範疇がテ節の主語である場合の方が目的語である場合よりも許容度が高いという特徴を持っていることが確認できる。これは、経験読みテイル構文に関する (12) と同様の傾向である。念のため、無生名詞主題句の例も追加しておく。結果は、有生名詞主題句の場合と変わらない。テ節内の主語が音形を持たないと考えられる (28) a と、テ節内の項がすべて音形を持っている (28) c の許容度は高いが、テ節内の目的語が音形を持たない (28) b には若干の許容度上の問題が生じている。

- (28) a. その壺<sub>i</sub> は、今の所有者が手に入れたときにはすでに e<sub>i</sub> 大きく割れていた
- b. ?身代金が入ったバッグ<sub>i</sub> は、刑事達が駆けつけたときにはもう何者かが e<sub>i</sub> 持ち去っていた
- c. このテーブルは、僕が見かけたときにはもう買い手が決まっていた

以上から、完了読みテイル構文の構文としての項構造についても、素朴な直感に基づくものではあるが、以下のことが述べられることになる。

(29) 完了読みテイル構文の項構造

- a. 主題句は非項要素ではなく何らかの要素の項である
- b. 非テイル文よりも完了読みテイル構文の方が1項多い

### 2.4. 習慣読みテイル構文

最後に検討するのが習慣読みテイル構文である。このテイル構文は、主題句と主格句を組み込んだ場合に、主題句の実体の習慣を記述するものであるのか、それとも主格句の実体の習慣を記述するものであるのかということに関する認定上の問題が生じる。

- (30) a. 涼子の妹<sub>i</sub> は毎年 e<sub>i</sub> 青梅マラソンに出場している
- b. 涼子は毎年妹が青梅マラソンに出場している
- (31) a. Aテレビの時代劇<sub>i</sub> は毎週 e<sub>i</sub> 高い視聴率を記録している

b. Aテレビは毎週時代劇が高い視聴率を記録している

(30) (31) 各 a は、テ節内に仮定される主格句相当の空範疇と主題句とが同一指示であり、「涼子の妹」や「Aテレビの時代劇」に関する習慣的または反復的な事態の生起を記述する習慣読みテイル構文と見て、問題のないものである。しかし、(30) (31) 各 b の場合、主題句（「涼子」や「Aテレビ」）の習慣と見るべきか、主格句（「妹」や「時代劇」）の習慣と見るべきか、といった問題が認められる。

以下 (32) に見られるように、習慣読みテイル構文も、テ節内目的語が音形を持たない場合の方が許容度が下がるなど、許容度上は経験読みテイル構文や完了読みテイル構文と共通した特徴を示すことが観察できる。

(32) a. 涼子<sub>i</sub> は毎朝 e<sub>i</sub> 妹を起こしている

b. ?涼子<sub>i</sub> は毎朝母親が e<sub>i</sub> 起こしている

このことからすると、経験読みテイル構文や完了読みテイル構文と同様、テ節内の述語の項よりも一つ項が増える構文であると考えは一応可能である。

しかし、経験読みテイル構文では、主題句の実体に関する経験や記録の記述と見て解釈上は問題なく、完了読みテイル構文についても、主題句の実体に関する完了的事態の記述と見て問題はなかった。ところが習慣読みテイル構文では、たとえば (30) b のような場合に、「涼子」ではなく「妹」の習慣を描写する文であるとすれば、主題構文であると考えられた動作継続や結果継続のテイル構文の場合と同様、主格句の実体に関する描写の文ということになる。

ここでは、習慣読みテイル構文を、主題句の実体に関連する反復的事態の生起を記述する構文と見るか、それとも主格句の実体の習慣・反復を描写する構文と見るかという問題については判断を保留し、次節においてテイル構文の意味論的な特徴を検討した上で本稿なりの判断を示す。

### 3. テイルの項構造に関する提案

これまで観察してきたことをまとめると、次のようになる。

(33) テイル構文の項構造に関する観察の結果

- a. 項が増える構文：経験読み・完了読みテイル構文
- b. 項が増えない構文：動作継続・結果継続の読みのテイル構文
- c. 判断を保留：習慣読みテイル構文

この結果は、すでに述べたように素朴な直感に基づくものであり、直感以外の根拠を持っていない点には注意しなければならない。ただし、ひとまずのところ、テイル構文には非テイル文と比べて項が増え、その項に関する何らかの記述・叙述を行うものと、項は増えず、テ節内の述語の項を文の主語とするものがある、という直感が成り立つことを提示することはできたと考える。

以下では、この観察を前提として、テイル構文の意味的な特徴と、前節において保留した、習慣読みテイル構文の扱いを検討する。

#### 3.1. テイル構文の解釈、意味的な特性と項構造

ここではまず、習慣読みテイル構文の問題を除外して考えることにすると、本稿の観察の結果は、テイル構文の構文としての項構造が、概略以下のようなものであることを示唆していると考えられる。テ節内の項構造は、テ節内の動詞の項構造に依存するため、ここではテ節に相当する部分をまとめて「状況」というように示しておく。

(34) テイル構文の項構造と解釈の対応（習慣読みについては保留）

- a. (経験者 (...状況...)) ……経験読み・完了読みテイル構文  
 b. ( (...状況...)) ……動作継続・結果継続の読みのテイル構文

経験読みや完了読みのテイル構文は、テ節が表す状況の他に、その状況によって何らかの記述が行われる経験者項が現れる。一方、動作継続や結果継続のテイル構文は、テ節が表す状況内の項の他に、新たに項が参加しない項構造を取る。この両者の関係は、状況の内項のみを持つ自動(詞)的な動作継続・結果継続のテイル構文と、状況の他に経験者という外項を持つ他動(詞)的な経験読み・完了読みテイル構文という、他動構造上の対立的な関係であると考えられる。

テイル構文の述部には、テ形述語(または述語+「て」とアスペクト動詞「いる」が現れる。ここで本稿では、テイル構文の「ある」に対する竹沢(2000)のアプローチや、直接受動文・間接受動文の対立に対する長谷川(1990)、Hoshi(1994)等のアプローチと同様に、テイル構文の「いる」についても、それ自体の外項(経験者)を要求する他動的な「いる」と、内項(状況)のみを要求する自動的な「いる」の対立があるものとする。

この仮説を導入する利点は、本稿の関心に即して述べれば2点ある。まず、テイル構文という構文において漠然と項が増えるとするのではなく、「いる」というアスペクト動詞の自他の異なりによって項の数が異なり、またそれに連動して異なった統語構造を持つ2種類のテイル構文が存在するという想定が可能になるという、項構造—統語構造分析上の利点が挙げられる。

さらに、自動的な「いる」は「状況の存在」を、他動的な「いる」は「経験者による状況の所有」または「経験者への状況の関連づけ」を表すとするような分析が可能となることで、このテイル構文の問題を、存在動詞「ある」や「いる」の自他の問題や、存在と所有を巡る問題の一つとして位置づけることが可能になるという、意味構造記述上の利点が挙げられる。この利点は、テイル構文の意味記述の精密化・体系化を考える上では重要なものとなると思われる。テイルの「いる」に自他の別を認めないアプローチでは、テイル構文に見られる動作継続、結果継続、経験、完了、習慣といったいくつかの解釈が、すべて並列的に、特に構造的にはグルーピングされることなく存在していることになる。しかし、自他の別を認めるアプローチであれば、動作継続と結果継続の解釈は「状況の存在」という自動詞的な「いる」の持つ意味に還元され、経験・完了・習慣という解釈は、「状況の所有/関連づけ」という他動的な「いる」の意味特徴に還元されることが可能になるのである。

### 3.2. 習慣読みテイル構文再考

2.4節での検討で、項の増減について判断を保留していた習慣読みテイル構文について、この3節でのアプローチに従って記述を行ってみる。

- (35) a. うちはいつもお父さんが晩ご飯を作っています  
 b. ?うちはいつもお父さんが晩ご飯を作ります

習慣読みテイル構文を他動的な「いる」の構文であるとする、状況の内部で反復的な行為を行う行為者と、その行為が作り出す状況を所有する経験者とは、別の実体であってもかまわない、ということになる。(35) aのような例では、反復的な状況を作り出すのは行為者である「お父さん」だが、それと関連づけられる実体は、「うち」の方である。他動的「いる」の構文だと分析する限りにおいてこの「うち」は項であり、主題構文だと考えられる(35) bよりも許容度が高いことも説明できる。

つづいて、以下の対について検討する。

- (36) a. あの研究室は毎年誰かが博士論文を書いている  
 b. あの研究室はいつも誰かが博士論文を書いている

(36) aと(36) bは、「誰かが博士論文を書く」という状況の反復と、「誰かが博士論文を書いている」という動作継続的な状況の持続という点で、厳密には解釈を異にしている。前者は他動的な「いる」のテイル構文として、主題句「あの研究室」と「毎年誰かが博士論文を書く」という反復的状況

が関連づけられたという意味を表し、後者は自動的な「いる」のテイル構文を述部とする主題構文として、観察者が観察する限り「あの研究室」では「誰かが博士論文を書く」という動作が「いつも」継続中である、といった意味を表す<sup>9</sup>。このような記述は、習慣読みテイル構文は他動的な「いる」のテイル構文であり、動作継続のテイル構文は自動的な「いる」のテイル構文である、とするような分析によって、はじめて可能になると考えられる。

(36) a は (37) a のように、テ節と「あの研究室」は他動的「いる」の項であり、動作継続的な解釈が現れない習慣読みテイル構文である。一方 (36) b は (37) b のように、動作継続のテイル構文を述部とする主題構文である。

(37) a. [あの研究室は (毎年) [[誰かが博士論文を書いて] いる]]<sup>10</sup>

b. [あの研究室は (いつも) [誰かが博士論文を書いている]]

ここで、アスペクト動詞「いる」に自他の対立を認めないアプローチを取ったとすると、(37) のような構造上の差異は考えられないことになるため、二つの文の解釈の違いは、すべて副詞（「毎年」と「いつも」）の意味特性に還元されることになる。現状ではそうしたアプローチを排除するだけの根拠はないが、少なくとも、「いる」の自他によって (36) a、b の解釈の違いを捉えるアプローチが可能であることは示せたと考える<sup>11</sup>。

以上から、本稿では、習慣読みテイル構文については、経験読みテイル構文や完了読みテイル構文と同様、項の増えるテイル構文であり、他動的な「いる」の構文であると認定する。これまでの考察の成果をまとめると、(38) のようになる。

(38) アスペクト動詞「いる」の項構造と解釈の対応（(34) の改訂）

a. いる（他動的）：（経験者（状況））……経験読み・完了読み・習慣読み

b. いる（自動的）：（ ）（状況）……動作継続・結果継続

本稿は、テイル構文には動作継続・結果継続という読みの他にも、経験・完了・習慣といったいくつかの解釈が現れると想定して議論を進めてきた。それらの解釈の決定については、確かに共起する副詞や、テイル形となる動詞の意味タイプ等も密接に関与するが、そうした要因とともに、あるいは、そうした要因の前提として、テイルの「いる」そのものの項構造上の特徴が関わっているということ、この (38) や、本稿これまでの考察は示していると考えられる。

#### 4. 提案の検証

本稿の提案は、テイルの「いる」に項構造上他動的なもの（それ自体の外項を持つもの）と、項構造上自動的なもの（それ自体の外項を持たないもの）との二種類を仮定するものである。他動的な「いる」の項構造では、統語的にはテ節に対応すると考えられる「状況」が内項となり、外項としては経験者が現れる。一方自動的な「いる」では項構造上「状況」のみが現れ、外項は現れない。

このことから、大まかな議論としてはあるが、他動的な「いる」の文の統語構造は以下 (39) (40) のようなものが、自動的な「いる」の統語構造については以下 (41) のようなものが想定される。

9 (36) a と (36) b の「あの研究室は」を比べると、(36) b の「あの研究室は」の方が場所句的な解釈が出やすいと考えられるが、このことも (36) b が自動的な「いる」の構文であることと問題なく整合する。

10 (37) a、b ともに、「毎年」「いつも」という副詞の統語構造上の位置については判断を避け、今後の課題としておきたい。

11 もちろん、(37) a はコントロール構文であり、(37) b は上昇構文（+主題構文）であって構造が違うため解釈も違う、といった説明は可能だが、ではなぜ同じくテイルを述部に持つ構文にコントロール構文と上昇構文があるのかという理由の説明が必要になると考えられる。この説明を、アスペクト動詞「いる」の自他の対立に求めるのが、本稿が考えているアプローチである。

- (39) a. [S<sub>1</sub> NP<sub>(経験者)</sub> [VP [S<sub>2</sub> NP<sub>(主格)</sub> ……V-て] いる]]  
 b. 健太は昨年妹が博士号を取得している
- (40) a. [S<sub>1</sub> NP<sub>i(経験者)</sub> [VP [S<sub>2</sub> ……e<sub>i</sub> …… V-て] いる]]  
 b. 健太<sub>i</sub> は昨年 PRO<sub>i</sub> 博士号を取得している  
 c. 昨年の学長賞<sub>i</sub> は隣の研究室が<sub>i</sub> e<sub>i</sub> 受賞している
- (41) a. [S<sub>1</sub> NP<sub>i</sub> [VP [S<sub>2</sub> ……t<sub>i</sub> …… V-て] いる]]  
 b. 健太が道を走っている  
 c. コップが割れている

テイルの「いる」をアスペクト動詞とし、かつ他動的なものと自動的なものを想定するアプローチの場合、他動的な「いる」が現れかつ空範疇を持たない(39)では、主題句の他に主格句も現れる複文的な構造が想定される。また、他動的な「いる」の構文においてテ節内の主語や目的語が空範疇となる場合には、(40)のような構造となると想定される。特にテ節内の主語が主題句と同一指示となる場合には、テ節内の主語位置に PRO が現れるコントロール構文となると推測される。

一方、動作継続や結果継続のテイル構文の場合には、「いる」は自動的なものであるため、「いる」自体の外項は現れず、文の主語にはテ節内部の要素が現れる。また、本稿のアプローチにおいては、自動的な「いる」も、外項は持たないものの一般の自動詞と同様に投射をするアスペクト動詞と考えられることになるため、(2) b のような単文構造説ではなく、上昇構文説の構造が仮定される。

この分析は、テイルの「いる」の項構造に関する本稿の提案にもとづく推測であり、この分析が妥当なものであるかについては、別途検証する必要がある。本稿の関心の範囲において重要なのは、他動的な「いる」と自動的な「いる」による二つのテイル構文が、その主語に関して大きく異なる特徴を持つということである。以下では主語指向性を持つ照応形である「自分」を用いたテストと、付帯状況デ句を用いたテストとを用い、テイルに対する本稿のアプローチの検証を行う。

#### 4.1. テイル構文の主語に関するテスト1——「自分」によるテスト

他動的な「いる」のテイル構文のうち、テ節内の項がすべて音形を持つ場合については、主題句(主節の主語)とともにテ節内の主格句も主語としての特性を示す。

- (42) a. 涼子<sub>i</sub> は先月友達<sub>j</sub> が自分<sub>i/j</sub> のデザインしたドレスで式を挙げている  
 b. 木村さん<sub>i</sub> は、会社を辞めたときにはもうお父さん<sub>j</sub> が自分<sub>i/j</sub> の退職金で別荘を建てていた  
 c. 健太<sub>i</sub> は弟<sub>j</sub> が毎週自分<sub>i/j</sub> のマシンで鈴鹿サーキットを走っている

照応形「自分」は、長距離束縛の可能な主語指向を持つ照応形である。話者により解釈に多少の揺れはあるだろうが、テ節内部の「自分」は、主題句も、主格句も先行詞とすることができる。(42) a であれば、ドレスをデザインしたのは「涼子」であっても、「友達」であってもよい。これは、本稿(39)a のような構造から予測できることであり、かつ、単文構造説のような分析が他動的「いる」のテイル構文には当てはまらないことの根拠となると考えられるものである<sup>12</sup>。一方、非テイル文の(43)のような例では、文自体の許容度の問題も生じるため、判定には難しさもあるが、「自分」の先行詞は主格句に限定される(または限定されやすい)ようである。

- (43) a. ?涼子<sub>i</sub> は先月友達<sub>j</sub> が自分<sub>?i/j</sub> のデザインしたドレスで式を挙げた  
 b. ?木村さん<sub>i</sub> はお父さん<sub>j</sub> が自分<sub>?i/j</sub> の退職金で別荘を建てた

12 所有者上昇のような構造を考えれば、(42) のような例があるとしても、上昇構文説は排除できない。ここでの議論が示すのは、他動的な「いる」のテイル構文が複文的構造であり、「いる」の主語とテ節の主語のどちらもが音形を持つ場合には、テ節の主語も「自分」の先行詞となり得るということのみである。

- c. ? 健太<sub>i</sub> は弟<sub>j</sub> が自分<sub>??i/j</sub> のマシンで鈴鹿サーキットを走った

主題構文における「自分」の照応先の決まり方についてはまだ精査すべき余地はあるが、(42) と比べて、主題構文の主題句を照応先とする解釈に一定の問題があるのは間違いないと思われる。この結果は、他動的「いる」のテイル構文が、非テイル文とは異なり複文構造的であるとする本稿での記述の結果と、問題なく合致している。

なお、自動的「いる」のテイル構文では、そもそも「自分」の先行詞たり得る有生の主題句と主格句を持った自然な文が作りがたく、「自分」のテストから何かを結論づけることは難しい。

- (44) a. ??涼子は妹が庭で(自分の)車を洗っている(経験読みでなく動作継続の読みで)  
 b. ??健太は父親が(自分の部屋で)倒れている(経験読みでなく結果継続の読みで)

#### 4.2. テイル構文の主語に関するテスト2——付帯状況デ句によるテスト

使役文や間接受動文においては、語根の動詞の項よりも項が増える場合がある。

- (45) a. 校長先生が生徒たちを走らせた cf. 生徒たちが走った  
 b. 健太が涼子に健二を殴られた cf. 涼子が健二を殴った

使役文である(45) a は、無標の文(参照例)と比べ、下線を付した使役者にあたる項が増えている。また、間接受動文である(45) b も同様に、無標の文(能動文)よりも1項多くなっている。こうした構文の当該の項において、付帯状況デ句との共起に問題が生じる場合があることは、石田(2003)において指摘した。ここでは使役文を例に、その現象を確認する。なお以下では、「ジャージ姿で」はすべて「校長先生」の付帯状況を記述する解釈であるとする。

- (46) a. 校長先生がジャージ姿で走った  
 b. ? 校長先生がジャージ姿で生徒たちを走らせた  
 c. ??校長先生がジャージ姿で生徒たちに学校中を掃除させた

石田(2003:76)ではこの(46) a~c の許容度の差について、行為者と使役者との事象への参加の仕方の異なりに基づいた説明を行っている。行為者は、文が表す事象の内部に存在し、事象が観察可能な場合には、行為者自体も直接観察可能な場合が多いと考えられる。一方使役者は、行為者とその行為という事象自体との関わりは間接的であり、発話者が事象を直接観察できる場合でも、使役者自体は観察できなくともかまわない。この差異が、文が表す事象が起こっている間保たれる、ある実体の付帯状況を記述する、という付帯状況デ句の特質と干渉し合い、文の事象と実体の状態(付帯状況)とが同時に観察できる(46) a では全く問題なく「校長先生」の付帯状況が記述され、事象と付帯状況の同時観察が困難な(46) c では、付帯状況の記述に問題が生じる、というのが、石田(2003)での記述の主旨である。

この分析の詳細はさらに検討を要する部分もあるが、本稿ではこの付帯状況デ句によるテストをテイル構文に適用し、解釈と主語の対応を確認する。

- (47) a. {健太が/健太は} ジャージ姿で走っている 動作継続  
 b. {健太が/健太は} ジャージ姿で倒れている 結果継続

- (48) a. ? 健太はジャージ姿で昨日この店を訪れている 経験読み  
 b. ??涼子はジャージ姿で去年健太が病院に一度だけ担ぎ込んでいる  
 c. \*涼子はジャージ姿で去年彼氏が目の前でバイクにはねられている

- (49) a. ? 健太はスーツ姿で午前6時には家を出ているだろう 完了読み  
 b. \*涼子はジャージ姿で午前6時には彼氏が家を出ているだろう

- (50) a. ? 健太はジャージ姿で毎朝川沿いの道を走っている 習慣読み  
 b. \*涼子はジャージ姿で毎朝弟が川沿いの道を走っている

(47) ~ (50) の各例で明らかになるのは、まず本稿が自動的な「いる」のテイル構文だとする動

作継続と結果継続の読みのテイル構文では、その主語は（主題句の形式であっても）問題なく付帯状況デ句による状態記述を受けること、そして、経験読み、完了読み、習慣読みのテイル構文については、その主語は、テ節内の主語と文の主語とが同一の実体を指し示す場合を除くと、付帯状況デ句による状態記述を受けることが難しいということである。併せて、許容度の高い(48)～(50)各aの例も、以下(51)のような語順の方が自然な文となることからすると、付帯状況デ句はテ節内に現れている空範疇の付帯状況デ句であって、音形を持った主題句の付帯状況デ句ではないと結論づけられる。

- (51) a. 健太<sub>i</sub>は昨日 e<sub>i</sub> ジャージ姿でこの店を訪れている  
 b. 健太<sub>i</sub>は午前6時には e<sub>i</sub> スーツ姿で家を出ているだろう  
 c. 健太<sub>i</sub>は毎朝 e<sub>i</sub> ジャージ姿で川沿いの道を走っている

この結果は、(46)のような使役文や「??健太はジャージ姿で涼子に弟を殴られた」のような間接受動文で起こる現象が、本稿が他動的な「いる」のテイル構文と呼ぶ文の主語でも起こることを示している。本稿の分析は、他動的な「いる」の外項は状況を関連づけられる経験者だとするが、付帯状況デ句の振る舞いからすると、経験読み・完了読み・習慣読みのテイル構文の主語は、事象への参加の仕方が間接的な実体であることを示しており、全く矛盾しない。一方、自動的な「いる」による動作継続や結果継続の読みのテイル構文の主語は、テ節内の行為者や対象等の項が上昇したものであるため、主語の実体の事象への参加は直接的である。したがって付帯状況デ句を伴う文の許容度の高いことも、本稿の分析とは全く矛盾しない。

## 5. まとめ

本稿では、無生名詞の主題句を持つ経験読みテイル構文の検討を出発点とし、動作継続・結果継続の読みのテイル構文、完了読み・習慣読みのテイル構文についても、構文の項構造を検討した。その結果、経験読み・完了読み・習慣読みのテイル構文については、項が増えていると考えられるが、動作継続と結果継続のテイル構文については、非テイル文と比べて項が増えているとは考えられないことが分かった。また、経験・完了・習慣の読みのテイル構文と、動作継続・結果継続の読みのテイル構文との差異は、アスペクト動詞「いる」の、項構造上の自他の対立に由来し、前者（経験読み等）は経験者を外項として持つ他動的な「いる」のテイル構文、後者は外項を持たない自動的な「いる」のテイル構文であるとする分析を提示した。

ある構文の分析に、助動詞や補助動詞における自他の対立を想定する分析は、項構造の分析だけでなく意味記述や統語構造の記述にも有効なものだと考えられる。本稿は、テイル構文に対しそうしたアプローチを用いての記述と分析を行ったものであるが、現状においてはより多くの現象の観察等の証拠集めを必要としている。ただし、2での観察や4節での検証の結果から、テイル構文には構造的な異なりを持つ二種類の構文が存在する、という点は明確にできたと考える。今後さらに詳細な分析を行い、また関連するいくつかの構文との比較等を進めていきたい。

### 【参考文献】

- 天野みどり (1987) 「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151, pp. 110-97.  
 天野みどり (1990) 「複主格文考」『日本語学』9-5, pp. 27-42.  
 石田 尊 (2003) 「日本語二格受動文の統語論的分析」未刊行博士論文、筑波大学。  
 石田 尊 (2005) 「テイル構文の統語構造」第3回現代日本語文法研究会 (2005年10月8日・9日、於筑波大学) 口頭発表。

- 石田 尊 (2006) 「テイル構文の統語構造に関する一考察—項構造の変化に関する記述を中心に—」(『文法理論の諸言語現象への適切な適用にむけて』平成17-18年度科学研究費補助金基盤研究(C)平成17年度研究成果報告書(研究代表者:矢澤真人)), pp. 1-16、筑波大学人文社会科学研究所。
- 石田 尊 (2007) 「テイル構文の項構造—テイル構文の解釈および統語構造との関係—」(『文法理論の諸言語現象への適切な適用にむけてⅡ』平成17-18年度科学研究費補助金基盤研究(C)平成18年度研究成果報告書(研究代表者:矢澤真人)), pp. 49-66。
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって(上)」『教育国語』53、pp. 33-44。
- 奥田靖雄 (1978) 「アスペクトの研究をめぐって(下)」『教育国語』54、pp. 14-27。
- 金子 亨 (1995) 『言語の時間表現』ひつじ書房。
- 金水 敏 (1993) 「日本語の状態化形式の構造について」国語学会平成5年度秋季大会要旨、pp. 21-30。
- 金水 敏 (1994) 「日本語の状態化形式の構造について」『国語学』178、pp. 107-101。
- 金水 敏 (1995) 「いわゆる「進行態」について」『築島裕博士古希記念国語学論集』pp. 169-197、汲古書院。
- 金田一春彦 (1947) 「国語動詞の一分類」(『日本語動詞のアスペクト』pp. 6-26に所収、むぎ書房。)
- 金田一春彦 (1955) 「日本語動詞のテンスとアスペクト」(『日本語動詞のアスペクト』pp. 27-61に所収、むぎ書房。)
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房。
- 工藤真由美 (1999) 「文法化とアスペクト・テンス—西日本諸方言を中心に」国立国語研究所口頭発表資料。
- 佐藤直人 (1996) 「「テ」で導かれる句の構造的な大きさと時称的解釈」『新潟大学国語国文学会誌』38、pp. 17-38、新潟大学人文学部国語国文学会。
- 竹沢幸一 (1999) 「空間表現の統語論—「叙述」の観点から」平成7~10年度文部省科学研究費補助金・基礎研究(A)(2)研究成果報告書「空間表現の文法化に関する総合的研究」pp. 91-121、筑波大学。
- 竹沢幸一 (2000) 「アルの統語的二面性—be/have との比較に基づく日本語のいくつかの構文の統語的解体の試み」筑波大学学内プロジェクト(A)研究報告書「東アジア言語文化の総合的研究」筑波大学文芸・言語学系。
- 竹沢幸一 (2001) 「コピュラ動詞アルの語彙的二面性とその構文的具現」『意味と形のインターフェイス:中右実教授還暦記念論文集下巻』pp. 713-723、くろしお出版。
- 坪本篤朗 (1992) 「現象(描写)文と提示文」『文化言語学—その提言と建設』pp. 578-564、三省堂。
- 中右 実 (1992) 「経験の HAVE」『現代英語学の歩み—安井稔博士古希記念論文集』pp. 333-342、開拓社。
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店。
- 長谷川信子 (1990) 「原理とパラメータのアプローチにおける受動構文」『認知科学の発展』2、pp. 89-107、日本認知科学会(編)、講談社。
- 福嶋健伸 (2004a) 「格体制を変えさせている~テイルについて—小説のデータを中心に」現代日本語文法研究会報告書「現代日本語文法における現象と理論のインタラクション」pp. 115-129、現代日本語文法研究会、筑波大学。
- 福嶋健伸 (2004b) 「現代日本語の~テイルと格体制の変更について」『実践國文學』65、実践女子大学。
- 藤井 正 (1966) 「「動詞+ている」の意味」(『日本語動詞のアスペクト』pp. 97-116に所収、むぎ書房。)
- 牧野美智子 (1999) 「<経験>をあらわすアスペクト形式シテイルについて—<完了>とは何か」『湘南文學』pp. 166-177、東海大学日本文学会。
- 益岡隆志 (1979) 「日本語の経験的間接関与構文と英語の have 構文について」『英語と日本語と—林栄一教授還暦記念論文集』pp. 345-358、くろしお出版。
- 益岡隆志 (1984) 「「一である」構文の文法—その概念領域をめぐって」『言語研究』86、pp. 122-138。
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版。
- 益岡隆志 (1992) 「日本語の補助動詞構文—構文の意味の研究に向けて」『文化言語学—その提言と建設』pp. 546-532、三省堂。
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』くろしお出版。
- 三上 章 (1953) 『現代語法序説—シンタクスの試み』(くろしお出版より復刊)
- 三上 章 (1959) 『続・現代語法序説—主語廃止論』(くろしお出版より復刊)
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店。
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店。
- 三原健一 (1997) 「動詞のアスペクト構造」『ヴォイスとアスペクト』日英語比較選書7、pp. 107-196、研究社出版。
- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』松柏社。
- 鷺尾龍一 (1997) 「他動性とヴォイスの体系」『ヴォイスとアスペクト』日英語比較選書7、pp. 1-106、研究社出版。
- 鷺尾龍一 (2002) 「上代日本語における助動詞選択の問題—西欧諸語との比較から見えてくるもの」『日本語文法』

- 2 - 1、pp. 109 - 131.
- 鷺尾龍一 (2003) 「もつ・ある・なる一助動詞の体系と非対格性」『月刊言語』32 - 11、pp. 69 - 75.
- Baker, Mark C. (1988) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing*, The University of Chicago Press.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*, D. Reidel Publishing Company.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris Publications.
- Chomsky, Noam (1982) *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*, MIT Press.
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language: Its nature, Origin, and Use*, Praeger Publishers.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, The MIT Press.
- Hoshi, Hiroto (1994) "Theta-role Assignment, Passivization, and Excorporation", *Journal of East Asian Linguistics* 3 - 2, pp. 147 - 178.
- Takezawa, Koichi (1987) *A Configurational Approach to Case-Marking in Japanese*, Ph.D. Dissertation, University of Washington.
- Ura, Hiroyuki (2000) *Checking Theory and Grammatical Functions in Universal Grammar*, Oxford University Press.
- Washio, Ryuichi (1995) *Interpreting Voice: A Case Study in Lexical Semantics*, Kaitakusha.

(受理日: 2011年3月22日)